哲學研究　第二百四十七號

歷史に於ける辨證的と産出的（承前）

由良哲次

八

生産するといふことは單に自らを分裂することではない。生産するとき生産者は自ら個性化の原理に從つて能作し、自らより他の個性を産出し、しかもこれによつて毫も自らを減ずるのではない。被生産者は生産者と別殊にして獨立の存在たる意味を帶び、被生産者は最早生産者の一部ではない。しかしてこの二者は相互に異別と獨立性をもちながら、類緣に於て接續關係をもち、卽ち連續してゐる。生産は異別を分離するとき個性的な根源の法則を被生産者に措定する。生産者は生産することによつて自己の個性と根源性を減ずるのではなく、産むことによつて他の個性に、自己の個性を通して異別であり乍ら同一の根源的方向を與へ、自己の個性の無限性を生産に於てこれを實にするのである。産むものほどまさに自ら永續的である。生産するといふことは自己が他になるのでもなく、また自己を絕滅せしめるのでもない。生産者と被生産者とが異別の同一を保つことが、個性を連續せしめる所以である。非連續の連續といひ、死することによつて生きるといふことを、

私は個性と個性の生産關係もしくは産出關係によつて解したい。

かくの如き「生産」が「辨證」と如何なる關係に於て考へらるべきかは、この小篇に於て漸次に明かにせんとする所であるが、さし當つて吾等に考へらるゝ所は、辨證はその意味規定の仕方によつては、かゝる生産の中に含められ得べきものであり、否辨證が歴史に於て妥當し得べきものとしては、必ず個性に於ける生産關係的なるものでなければならぬ。しかして歴史に於て生産的と辨證的とを結合しうべきものは、一つに歴史構成の要素たる個性概念の内面的本性の尋究を措いて外にないと思はれる。辨證は理性の本性であるといふが、辨證がもし生ける實在の本性であり、歴史的なる實體に妥當しうべき眞理であるならば、そは單に肯定否定の思惟論理的關係以上のものをもたねばならぬ。歴史に於ては肯定は常に否定と相卽し、先づ肯定あつて次に否定が來るといふ如きものではない。歴史的實體が個性として自らを實存的に支持し、無限性を現實的に陶冶しゆくことが、肯定的にして同時に否定的なる所以である。歴史的なる一皆の事實の特質を掩ひうべしと思はるゝ「生産」といふことが、卽ち肯定的にして同時に否定的なるものである。これぞ生と歴史の本質を、最も具體的なる陶冶の作用に於て示すものである。人間的歴史の個性相關に於ては、自己の個性を支持することが同時に相關に於てある他の個性を根源的に限定することであり、他の個性を限定するといふことは又同時に他の個性を個性として支持することである。歴史に於ける生産もしくは産出と

は、ひとり肉體的生命のことではなく、個性相關が何等かの創造を含む所の一皆に妥當する意味をもち、歴史的なる相關、影響の如きはすべて生産の根本形式をもつて説明することが出來る。歴史に於ける辨證とは自己自らのうちより新たなるものを産むことでなければならぬ。歴史的相關は常に個性の對峙である上に、その新たなるものが舊きもの、もしくは舊き狀態に對して異別のものをもつ點にて又反對の對峙をもつものである。歴史的辨證が異別のものを産むとは、自己より新たなる個性を創造することか、もしくは既にある他の個性に對して自らの個性に因由する一の方向を措定することである。前者は狹義の生産關係であり、後者は普通精神的影響と言はるゝものであり、ともに廣義の生産關係である。生産は個性の辨證を含む根源的な連續である。歴史に於ける關係は單に辨證をもつて示すことも出來ず、單なる連續をもつて示すことも出來ない。この二つを實的に含む生産概念のみ、歴史に於ける關係を最も具體的に示すと思はれる。

歴史に於ては單なる推移性以上に革命性があることは事實である。革命に於ては原則的なるものの轉換があるを常とする。しかし革命に於ても新たなるものゝ發生はあつても、舊きものよりの斷絶があるのではない。歴史に於ける連續性とは史的因果の斷絶性のなきことを意味する。新たなる第二の原理を生んだものは第一の母胎である。佛蘭西革命は決して佛蘭西民族を壞滅せしめたのでもなく、佛蘭西精神を斷絶せしめたのでもない。却つてこの民族、この精神の眞なるものゝ更生に外

ならなかつた。革命は突如の變異の如くして、やはり一の生産の圖式を離るゝものではない。植物に於ける突然變異の如きも、一の生の創造である。それは一の種に、かつてなかりし著しき特色の發生し、これを過去の類型に同一のものを認め難いと言ふ迄であつて、生の因果を、物の因果によつて、既往の要素の聯結によつてのみ説かんとする際、この後者の範疇に適應せざる要素を見るのみなのである。植物の生も常に創造を含み、現今の種々なる形態は常に、かつてなかりし簡易の上に、生の自己保持と相關的順應との事情に應じての不斷の創造があつたことによるのである。生は創造であり、創造的なる生は生産的連續を離るることはない。生むとは一の個性創造として進化的である。同一を繰返す永遠の停滯ではない。

歴史に於て産むものとは既に個性的な根源者であつて、自らに固有の法則性をもつものである。この個性的な生産者はその作用に於て自由であり、自主的である。しかして生産するものの究極的根源は凡ゆる個性的なるものの母胎であり、それは無限性をもつものと言はねばならぬ。産むものの根源こそ眞に具體的な無限性をもつものである。人格的な個性もそれ〴〵にかゝる根源性をもつ限りに於て絶對者であり、産む母胎として無限性をもつてゐる。歴史的個性こそ具體的な絶對的根源をもつものであり、その特質的な能作は卽ち生産作用である。辨證法とは個物の自己限定作用でありとし、もしくは兩者を對立せしめる意味をもつと同時に、兩者を統一する意味をもつといふ義に

於ては、歴史に於ける生産の概念は充分に辨證の意味をもつものである。[註一] 只歴史に於ける辨證には絶對の矛盾の代りに異別の唯一性をもつ個性の相關があり、絶對否定の代りに個性的限定がある。個性の生産と生産的統一、こゝに歴史的辨證が見られ、しかしてこれにては個性は個性でありつゝ相關し連續するものであり、連續的にして辨證、辨證的にして連續的なるものである。

九

辨證なる概念が、もしくは方法が、完全に歴史の眞實を掩ひ盡し把捉せしむるものであるならば、吾等はこれに生産概念をもつて補綴するの必要はないであらう。しかし、ヘーゲルの辨證概念の如き本來論理的性格のものであつて、歴史が完全に論理化し、論理的に導き得ざるものなる限り、そは必ずしも歴史を規定し盡すに必然にして充全なる根據を持つものとは言ひ得ないであらう。もしヘーゲルが精神現象學を始むるに感性的確實性を以てし、その論理學を始むるに純粹有をもつてした如く、歴史哲學に於てもその出發とする素純の要素を求めたならば、そは個性の眞實でなければならなかつたと思はれる。かくて歴史哲學を導くものは眞に深き個性的實在そのものゝ眞理でなければならなかつた筈である。それは單に肯定否定の思惟論理でもなく、矛盾する二元對立の辨證圖式でもなく、個性の相關と連續の眞性に見出されたる論理でなければならなかつたと思はれる。彼は思惟論理と實在の論理との合一を、歴史哲學に於ては創造神學的根據に俟たねばならなかつた

と思はれるが、それは終にあらゆる歴史の過程を攝理の名による必然に化し、歴史は自由の意識の進歩であるといふことをも吾等の實踐の意識よりは空名に等しきものたらしめた。ヘーゲルの歴史哲學に對して吾等が近親を感じえざる所以は、それが歴史の論理として尙ほ思惟論理の圖式の優位と、そして究極に且つ現實的に示されたる創造神學的獨斷とにあると思はれる。

ヘーゲルに於ては「辨證法は自然及び精神の世界のあらゆる個々の領域や形態の中に妥當する」ものとして豫定せられてゐたものではあつたが、辨證的に解され得べき自然が、果して自然の本性適合的な認識を齎すか否かといふことには疑問があると同時に、後者の精神の世界に於て見出さるる辨證なるものも、その具體的なるものとしての歴史の領域に於ては、思惟論理の形式以外に別殊の意味内容をもつべきものではなからうか。彼に於ては歴史は既に論理化された歴史の世界であつて、こゝに論理的なるものが妥當するのは問題ではなく、この存在的なるものが論理的性格をもつてゐることは寧ろ最初より然かく定められてゐるによるのであるが、しかしこゝに問題となるのは、その論理化が殊には歴史的現實の眞性質を掩ふことなきやといふ點と、その辨證的なるものが歴史的實體の相關と發展とを示す圖式として完全なりやといふことである。

ヘーゲルが考へた歴史的領域は、現實そのまゝなる生ける歴史の世界ではなくして、寧ろ理念化されたる精神史の世界であつたとも言ふべきであらう。それは存在する個々の世界ではあつても、

すべてが媒介されたる、もしくは媒介されうべき世界であり、しかして媒介するものとは自働せる、しかして自己自らに同一なるもの die sich bewegende Sichselbstgleichheit であり、媒介とは自らが他となれるものが、自己自らとの媒介 Vermittlung des Sichanderswerdens mit sich selbst をなせるに外ならない。そこには自立し主宰すとせらるる個は只基底的なる精神の異別化し、他働せるものに過ぎない。媒介せらるゝものは、自らの存在としてよりも、自らを他のものゝ異相として自覺する所にその精神史的意味が見出される。それは唯一の實體を自己の根源的な自由と主宰に於て生ける生の意識の具體性よりは遠ざかれるものと言ひ得よう。しかし、ヘーゲルの精神なる概念もディルタイやノール等がそのヘーゲル思想發展史に於て吾等に示す如く、決して生に緣遠きものではなかつたことは固よりである。若きそして獨乙的なヘーゲルには、カントより享けたる根本概念も尙ほ「生」なる語をもつて表現されてゐたが、これが希臘の「理念」と結合して客觀化され、中世的なるものとスピノーザの思想との接近によつて形而上學的色彩を受け、本來の神學的思想傾向との結合に蘇生して「精神」なる概念に成熟を示したのである。從つてヘーゲルの歷史哲學も、まざ〳〵として生ける歷史の生を眺めるよりも、精神哲學の一領域として、否寧ろこれをロゴスの創造的始原より、永遠的な神的觀照を遂げたる如き性格をもてるを拒み得ない。既に多くの人々によつて指摘せられた樣に、歷史の事實的發展の論理的意味づけが多くの誣曲と時間的因果の拂拭を齎らしてゐる

許りではなく、その東洋文化に與へられたる原始的使命と、あらゆる文化がゲルマン帝政文化の繁榮のために死滅せなければならぬといふ宣告に對しては、今日の吾等の、殊に東洋の吾等の誰か無條件的にこれを肯定するものがあらうか。

ヘーゲルによれば「哲學史は神々の諸像のパンテオンに比すべきもの」である。それは永遠にして現前的なるものを取扱ふものである。しかし、またそれは永遠なる神々の現實の諸像を「理念の段階」として解せねばならぬのである。この意味よりせば、現實が永遠の表現として永遠を宿しつゝも、併し現實的にはそれの段階として、段階はよし他の段階の爲のものであり、他の段階に推移するものとして考へられてゐるとはいへ、現實的にはそれの存在性に於ける個性的意味が承認されてゐる筈である。歷史は連續せる發展の過程ではあり乍ら、その諸像は「反駁され盡されぬ」永遠の個性を示すものである。歷史に於ける要素はすべて一面に於て固有の個性でなければならぬ。そして個性の世界に於て特色的なることはそれが必ずや他の個性との相關に於て自らの存立を見出すものであると同時に、その相關する他者が決して相對立をなす唯一者ではなく、多數否、寧ろ無數の個性の存在であるといふことである。これが歷史の現實を作りなす實相である。しかしてかゝる個性の相關の領域に於ては果して「矛盾」なる概念がその關係規定として完全に妥當するであらうか。個性の相關關係は矛盾せずして只相互に存立するもの、矛盾は二肢選擇の關係をなし、對者は常に

一者であるに對し、個性の相關は寧ろ反對關係として無限相關の關係をなし、個性は常に無限の中の唯一性として自らを示す。反對は矛盾に歸することは出來ない。反對は何等かの矛盾を含むが故に相反を招くとも解することを得るであらうが、しかし矛盾は本來一義的否定をその能作に於て表はすべき論理的性格のものであり、反對、殊に個性の相反は無限の他者の中に、寧ろこれあつて自らの唯一性を實現しうるものである。他なくして自らも存しえざることは兩者相同じきも、しかし矛盾の關係にあつては他を一義的に否定せんとする根據は寧ろ自己の獨存性を他の絶對否定に於て主張するものといふべきに對し、個性の相反は寧ろ他者の存立を必然の豫想とし、他なくして自らもなく、他との共同性がその本質である。もし矛盾も、對者なくして自らもなき性質を含むと言はば、他なき後の自らは既に自らよりは異なれる性質のものとしてのみ存しうべきものであらう。これに反し、相關關係に於ては、他に對しても自らに對しても絶對否定をなすことなく、言はゞ無限否定に於て飽く迄も自らの自性もしくは個性の支持と同時に他者の存立と純化を期待する。そしてもし矛盾も亦かくの如き性質を保有すとせば、そは純粹に論理的性質を離れたる矛盾であつて、ヘーゲルの矛盾と從つて辨證の概念が歴史的存在の領域に妥當しうべきものとして考へられてゐた限り、寧ろ私の考へによれば、反對概念の內容を無意識的に混入してゐたものとも解しうべく、嚴密に二肢選擇の非連續的絶對辨證に徹底せんとしたキルケゴールが、ヘーゲルに對して反噬した所以

もこゝに存すると思はれる。辨證を論理的に徹底すればキルケゴールの異質的飛躍の辨證のみが正しきものにしてヘーゲルの辨證に尙ほ連續的と有機的の暈影の多くを認めうるのは一面論理的には不徹底であり、まさにその故に歷史的なるものに妥當する要素をもち得た所以とも考へることを得るであらう。異質的飛躍といふことが、根柢的なるある大いなる絕對の力の豫想なくしては不可能であつた樣に、矛盾といふこともこれを嚴密なる論理概念として支持せらるゝ限り、矛盾するものは歷史的領域に於ては決して存立することを得ず、矛盾よりして反對する存在を演繹し出すことも出來なかつた筈である。存立する個性の相關の歷史的世界は Widerspruch のことではなくして、Widerstand の實存のことに關する。論理的なるものは矛盾的對立に於てのみ考へられうるが、存在的なるものは只反對的對立である。もし歷史的個性が相互に矛盾し、絕對に兩立を許しえざる關係にあるとき、そは自らの唯一者のみの存立を絕對の目標とするが故に、唯一者のみの存在は常に必ず對立するものゝ絕滅に迄戰ひ拔かれねばならぬであらう。しかし羅馬とカルタゴの如き他者の完全なる絕滅に迄至るべきことは歷史上常ならぬ事實であつて、史上の爭覇は多くは他者との相關の位置秩序上の爭ひに過ぎず、しかしてそは相反の二者の對立ではなくして常に無限の相關に於て展開せられる。すべてが狼にして相互に狼に迄の見解は人間社會と歷史の眞相の直觀ではない。辨證觀が歷史觀に援用せられてその一部に唯物史觀の階級鬪爭觀を結果し、人類の歷史は階級鬪爭の歷史

なりといふ見解を招いたことも、その一半の罪は辨證法そのものに由來する所と言はねばならぬ。辨證は思惟法則としての矛盾を基本とし、その限り、純粹理念の範疇の學としての論理學の世界に妥當すべき原理であるに反し、存在の領域は寧ろ反對律の妥當すべき領域である。そしてこの反對律は、私の考によれば、存在するものゝ基礎的理由に着目せらるゝときは、自ら、思惟の法則の中に普通に數へらるゝ理由律との密接なる關係をもつべきものである。矛盾律は同一律を究極に豫想し論理的領域に純粹に妥當するに對し、反對律はそれの理由律を寧ろ具體的な歴史的存立の世界にもち、しかして自ら又個性的なる存在領域の基礎にその究極の立脚をもつものゝ如くに思はれる。卽ち矛盾律は同一律の豫想に於て範疇の論理の主たる基本原理であるに對し、反對律は理由律と結合することによつて歴史の論理の基本原理となると考へられる。ショペンハウエルはその理由律論に於て存在の充足理由 principium rationis sufficientis essendi を考へ、これを主として相互制約的存在としての數學的理由に限つたが、併しこは更に實存するものゝ充足理由として、行と德の根據としての principium rationis sufficientis agendi とも結合して、個性的存在の理由として廣く歴史的領域の實在的基礎に考へ進むべきであつたらうと思はれる。かゝる個性の論理のみ眞に歴史の論理を基礎づけ歴史の形而上學への出發を準備するものと思はれる。とにもかく、ヘーゲルが歴史に於てその存在的なるものゝ全般に辨證的性格を妥當すとし、矛盾的なるものを歴史的存在の根本的性

質としたことは、論理と歴史、矛盾と反對とを合一したと言ふべきであるが、この合一に於ては寧ろ單なる論理を超え、歴史以上なる神學的思惟、ロゴスそのものが論理的本性以上に存在を喚び起して自らを具體化するてふ神祕的直觀による創造的知見の根源にあつて存したりしを認めねばならぬ。

十

ヘーゲルの辨證法が、自然及び歴史に亘つて一樣に完き意味にて根源的に妥當し得るといふには、種々なる異議の挿まれ得ることは、彼の死後その思想體系がそれの餘響に於て種々なる反動を經驗したことによつても知り得る事實である。彼に於ては辨證法そのものが一の明確に規定されたる法式として示さるることなく、彼の體系に於て占むる意味の基礎的なるに比して精細なる解說を缺いた。それは彼にとつては最も自明のことであり、只彼の全體系がこれの論證として示されたものであつたとすら解することも出來よう。しかしその多岐なる部門と生涯に亘つた變遷とに於て吾等に示さるゝものは決して單純ではない。彼の辨證法が只具象的な現實そのものに就て見出さるべき原理として示され、事物そのものに於て最も具體的且つ明瞭に見出される原理として、根本的にして單純なるものと考へらるゝとしても、併も尙ほ却つてそこに多くの曖昧性と多義性を藏してゐたことが認められる。吾等は自然に於ける辨證法と歴史に於ける辨證法とが、純粹に論理的なる辨證法

と內實的に精密に相同じきものと認めることを得るであらうか。辨證法がかく具象より乖離せるものとしてではなく、事物に卽して見出さるる性質であるならば、事物の存在樣式の異るに應じて內實的に異るものとして自らを示さねばならぬ筈である。もし辨證はこれ等の存在の諸樣相を通して存する形式であるとすれば、事物の存在の諸領域は單に偶然的なるものとなり去るにあらざれば、形式としての辨證は何等かの抽象に陷れることを知るであらう。

ヘーゲルにあつては、批判的觀念論に於ける樣に、現實的對象は理性的主觀によつて形成さるるものなるが故に理性的であると言ふよりも、寧ろ一皆の現實そのものが理性的であり、理性は現實對象の內容に滲透すると言ふよりも、具體的なる對象そのものが理性の表出に外ならなかつた。併し乍ら現實の理性的性格を認むることの中には自ら思惟に於ける論理的性格に基準をもつことを掩ひ得ない。ヘーゲルは一切の現實を根源的に論理的思惟に基づかしめた。彼によれば、人は思惟することによつてのみ活動的であり、思惟に於てのみ我は我たるものであり、意志をも亦思惟に歸せられる。ローゼンクランツが「意志の論理學」として特質づくる「法の哲學」に於てすら、ヘーゲルは尙ほ「意志は思惟の特別の仕方であり、現實有(ダーザイン)に自らを移置するものとしての思惟に外ならぬ」[註二]とする。「この思惟と概念なくしては對象といふものも單なる表象であり、名たるに過ぎない。思惟規定及び概念規定こそ、それに於て對象が本來にある所のものである。」[註三]その「思惟」が畢竟は意識に

於ける論理的主觀を基準として性格付けられたるものたるは否定し得られず、自然と歴史の對象の一切がこの論理的思惟の關與なくして成立し、もしくは作成せられざるはなき限り、その存在領域の根本規定を辨證的なるものに認めることは一應可能なることとして承認されねばならぬ。

ヘーゲルの意味する「思惟」は決して具象を離れたる概念ではないことは言ふ迄もない。彼にては學のもつ根本規定は「充實せる内容の自己運動の生命であり」、又彼のいふ絶對理念といふものも「其の内容を自己そのものとして直觀する所の概念の純粋形式であり、この内容は論理的なるものの體系であり、ここに形式として理念に殘るものはこの内容の方法以外の何物でもない。」[註四]即ち形式といふも單なる外的形式ではなく、内容の靈(ゼーレ)であり、概念であり、この概念の方法が自ら辨證的であり、即ちこの方法はその内容の性質上辨證的たるを必須となされるものである。辨證とはその固有なる規定に於ては悟性的規定の、物の、有限的なるもの一般の自體の眞性である。[註五]概念が即ち實有的眞であり、その思惟といふは毫も主觀的抽象を交へざる内容に於ける本質的自體そのものゝ運動を見るあくまでも具體的なる思惟である。この現實的事物、本質的自體に於ける運動そのものを把捉する思惟が尚ほ何故に主觀的思惟の推論形式を基準としなければならぬかに就ては、ヘーゲルに尚ほ別殊の質さるべき根據が存するが、吾等が茲に考察を誘はるゝことは、具象的現實そのものが持つ内容の運動としての方法は、その現實の存在の樣相に應じて別異の特質を持たざるやとい

ふことである。

辨證が見出さるべきものとしての具象的なる現實は、これを最も廣義に解して、三種の樣相、卽ち凡そ存立するものの存在的、論理的、實存的の存在樣相が考へられる。この第一は自然的存在に於て最も優位的に現はるゝものであり、その本質的特質は量の大小の力學的關係に於て存在するにある。その第二は思想的存在であつて、論理的思惟に於て存立し、肯定否定の概念的關係に於てあり、第三のものは人間的、歷史的實存そのものゝ存在樣相であつて、個性的相關の生產的關係に於て存するを特質とする。これを哲學的思惟の對象領域として大きく分つならば、普通に自然哲學、論理學、歷史哲學の三部分として現はれるであらう。しかして茲に問題となるは辨證法が、これ等三つの異る存在樣相をもつ現實に於て見出さるるといふとき、果して單純に一樣の形式—しかも內實的なる—をもち得るかと言ふことである。現實そのものに於て見出さるゝ形式としての辨證が論理的關係の推理圖式を基本形式として採れること掩ひ難きとき、これが思想的存在に妥當すると嚴密に同一の仕方をもつて、他の領域の力學的關係と個性關係に妥當し得るであらうか。もし批判的觀念論の如く、吾等の經驗の成立が認識主觀の論理的形式を離れて存せざるが故に、その論理的圖式に從ふと言ふならば格別、單に形式的立場ではなく、存立せる現實の內容そのものがもつ形式が、論理的推理形式たる辨證に適應さるべしと言ふには、その根柢に現實を一樣に論理化し得ると

の假定、もしくは現實の創成そのものに一の神學的なる豫想の許されてのみ可能なることを認めしめる。自然的存在と歴史的實存の領域に等しく辨證の根本圖式が通用さるべしといふことは、思惟の論理を創造神學的論理と同一化することによつてのみ可能であつたと言ひうるであらう。しかしこの同一化は論證を絶したる前提でありしのみならず、創造的神學的基礎を根抵に擬することによつて思惟論理の辨證圖式を存在の論理と實存の論理に一樣化して、神學的基礎が現實の規定に對して論理的辨證的形式をとつたことが唯一の必然たりしか否こゝに自然の辨證と歴史の辨證とを導いたことがそれ自身問題を殘すのみならず、この一樣の辨證が果してそれ〴〵の現實領域の特質を消去することなくしてよく自體の眞性を解明するに充分であるかといふことは疑問である。そしてまたヘーゲル以後の彼に對する反動が主としてこの方面より起つたことも事實である。卽ち實證主義、唯物論、歴史主義、相對主義等がヘーゲルとの不可離の關係に於て開展し乍ら、ヘーゲルに對する反動を含む所以のものは、一はヘーゲルの形而上學的基礎が現實に對して必然とする論理的辨證的性格に對する不承認と、他面辨證法が現實を規定するに只に概念關係をもつて、力學的並びに個性的關係を律し盡さんとせしことに對する反噬として認められる。

ヘーゲルの本來の志圖によれば「辨證的なるものは一般に、一切の運動、一切の生命、現實に於ける一切の實行(ベテティグング)の原理、科學的なる一切の認識作用の魂(ゼーレ)である」として見るにある。そしてこの生

動の原理、作用の魂が辨證的なるはその根本本質に於てロゴス的なるによる。彼はロゴスをもつて一切の實在の根本本質とし、理性をもつて現實と本源的に同一化し、その生動の過程を論理的推理として規定せんとする。こゝに一切の過程を規定せんとした理性はその根源と基準を、自らを思惟する論理的思惟にもつことは論ずる迄もないが、そこに特質的に見出さるゝ辨證が、等しき內實的な妥當性をもつて自然的存在と、歷史的實存の領域を完全に規定し盡しうるであらうか。概念の辨證が論理的思惟に於て可能であるとまさに等しく、自然の辨證と歷史の辨證とが可能であらうか。

ヘーゲルに於ける辨證法とは、先きにも言へる如く事物を離れたる抽象的なる思想ではなく、一般に事物に於ける必然を意味すること自らの主張する所であり、從つてそは自然的存在にも妥當する必然たることはその所期する所であり、ここに自然辨證法の見出さるゝことも當然である。しかし、自然をそのありのまゝなる存在の性格について見れば、それは決して自らに矛盾をもつものでもなく、自らに反省をもつものでもなく、自らよりの自己轉化をもつものとは考へられない。自然構成の根本形式としての時間空間にも、自己否定的發展ありとは考へられない。希臘哲學に於けるエレア派が辨證を運動に適用し、またアリストテレースが運動とは、すべてその反對に變異することなりと考へた物理學的知見は、ヘーゲルに於けるイデーの概念が希臘的なる具象性をもつ點よりして、ヘーゲル思想との聯關をもつものであるが、しかし、凡そかくの如き形而上學的なる思惟要

素をもつ思想は近代の物理學的理念とは相排拒する關係にある。一切の擬人化を去り、只因果の函數關係をのみ規定せんとする近世物理學にては、その對象とする純粹機械觀的世界は力を豫想すと雖も實體としての力を說かず、自因の運動を說かず、これを自働するものゝ相關の世界とは考へずして、實體の消去に於て只數量的函數關係をのみ規定せんことを理想とする。[註六] 辨證法が內容それ自らの運動の必然を意味するものであるならば、近代自然科學はかゝる辨證法と背致する關係に於て發展し、しかしてヘーゲルの自然哲學が自然の本質を規定するものなりと考ふるとき、寧ろ純粹自然科學の考へ方よりの排擊を受けたることも自らなることである。ヘーゲルの自然の形而上學が物理學的世界と絕ち切られたる領域の超越的考想として成立するものならばとに角、自然と聯關をもち、否、物質の內實的規定を與へんとするものなるとき、茲に却つて多くの矛盾を牽き起したることも止むを得ず、近世自然科學が寧ろ意識的に形而上學の排擊と擬人論よりの脫化を企てたことも當然である。併し又ヘーゲル自らに於ては、存在と物質を精神と思惟より異別の無緣者として止まらしむべく、彼の哲學はより强く世界知的であつた。ヘーゲルは辨證を游星の運動にまで及ぼしてゐる。游星の運動に於ける辨證とは、それに働らく他在を現在に齎らす力學的關係と考ふるより外ない。しかし辨證とは本來對立を自らより導き出すものと考ふべきならば、無數の他在との相互牽引の關係の中に自らを見出す游星の運動が根本的なる意味にての辨證をもつとは言ひ得べきではない

であらう。しかしヘーゲルは、物質全體の本來的性質に關してライプニッツ的なるモナッド論的思想を表述し、物質構成の最少單位がもつ欲求 Appetit, 活力 Nisus 目的的活動 Entelechie が自己自らの中に「缺乏するもの」をもち、自己自らを否定することによつて自己より出で行く geht es ausser sich 性質あるを認め、これが物質の運動の生ずる因由であり、また運動が內面的に對抗的力を藏する所以であることを認める。[註七] ヘーゲルが地球を有機體とし、地球に生命ありとし、天體の靈を承認する如き、今日の自然科學的世界觀とは到底相容れざる觀點を支持する所以は、卽ち自然に於けるメカニズムそのものに辨證的運動の性質を考へ入れんとする故は、物質そのものを自働的なる原因とし、それの靈の能動性が辨證的運動を導くと考へるによる。かくて自然科學をもその基礎より規定しうべきものとする彼の自然觀には常に世界創造說的知見のこれに結合して考へ合さるゝものと言ふべく、畢竟彼の哲學はその出發點に於て神學的豫想の上にのみ成立してゐるものとしてのみ充全の解釋は可能であると思はれる。卽ち自然的存在に關しても彼はその本質に靈を考へ込み、もしくはそれを靈として考へ、それの自己否定性と自己脫出性より、その過程を二元的對立の矛盾相反の推移過程と見たのである。しかも尙ほここに實在をも矛盾、否定をもつものとし、その過程を推理として見る辨證的知見の根柢には思惟を思惟する思惟論理の形式の橫たはることは見逃さるべくもなく、その二元相反の推移も實はこの思惟形式に基づくに因るのである。かくの如き二

元性的なる唯心論的基礎の見地の上にヘーゲルの自然哲學は成立してゐるのであるが、茲に吾等の注意を喚ぶべきことは、アリストテレースの目的論的形而上學に於ても、ライプニッツの單子論的形而上學に於ても、實在を自働する實體と考ふるもそれを個體論的多元的なるものと考へ居ることにして、これを相矛盾する二元的なるものと考へたる所に寧ろヘーゲルの自然的實體に關しての論理的概念的思惟樣式の單直なる適用を見るのである。自然の本性に於て見出さるゝ自己否定と自己脱出の二元性の論理がよし自然の運動をその內面的なるものより說明しえたとしても、自然がもつ要素の多元性の生成の根源的說明は、彼の自然哲學に於て多分にその意圖の含まるると思はれるに拘らず、吾等を首肯せしめるには充分でない。そしてもし辨證の論理がこれの可能を示すものとせば、それは寧ろ產出の論理に近づけるものと言はねばならぬ。

ヘーゲルの自然哲學が、かく本來に唯心論的であることは、これに依據しようとする唯物史觀と自然辨證法とが、共にその正當なる繼承でなきことを知るに吾等は苦しまない。ヘーゲルの思想體系中の一部の思想には唯物史觀に援用轉釋さるべき可能をもつものがあるとしても、その全體より見ては唯物史觀は寧ろ甚だしき誣曲であり故意を含む誤解である許りでなく、唯物的なる過程は正しき意味にての歷史と呼び難きものであり、「唯物論的」と「歷史的」とは本來の意義に從つては結合すべからざるものである。何となれば單に物的なるもの、自然的なるものの過程に見出さるゝ時間

は、決してそのまゝにては歴史を構成する歴史的時間ではなく、單なる物的に見られたるものの推移は歴史構成の基礎を缺くからである。唯物史觀が特に近世に於て人の生活經驗に於て占むる物質の意味を重視し、游離せる精神の高揚に對して吾人を警戒せしめたる功績は認めなければならぬが、しかし、ジンメルも言へる如く、經濟的動機が人間意識を貫徹し、非經濟的内容に對立し、これを意識的に生産するとは謂れなき主張である。[註八] また歴史の見地よりは、マイヤーが批評せる如く、歴史の變化が經濟的要素をのみ基礎的なるものとして認容するこの見方に就ては、政治的要素の却つて決定的なること、及び個人の創造力の決定的力を無視する能はざることが指摘されうる。例へば伯林都市の繁榮はホーヘンツォルレルン家及びプロイセン國の政治的決定力によつてのみ説明され、ワットの蒸氣機關の發明といふことが經濟生活の根本的變化を規定した。[註九] 本來唯物史觀に於ては正しき意味にての「規定」といふことは言ひ得ない筈であり、物が物を規定するといふことは根本的意味にては不可能のことである。それは强力者壓倒の辨證に過ぎず、これも單に機械關係に止まる限り根本的なる意味にての辨證とは言ひ得ない筈である。唯物史觀は歴史の論理として示され乍ら歴史に於て掩ふべからざる個性の要素的力を無視してゐる。この個性にこそ、まさに時代の含む必然を根本的に表徵する偉大なるものが認められるのみならず、これがもつ個性的意志によつて時代の必然を規定するのである。生産者としての人間が、その生産せしものによつて規定されるといふこ

とは、唯物史觀の一根本知見となつてゐるが、これは個性が自らの生産せしものの中に存する個性法則と、他の個性の生産せしものの中に存する個性法則との相關關係に於ける規定性として以外には意味のないことである。[註十]

またエンゲルスによつて、最初社會科學の基礎として考へられた唯物辨證法が、自然認識にまで擴大せられて唱導せらるるに至つた自然辨證法に關しても、自然そのものに於ては何等本源の意味にての辨證的性格をもつものとは考へられない。物理學の最近の發達が示す新量子論が示す樣に、一義的必然規定としての因果律は否定され、そは不確定性の原理によつて確率的規定の繼起關係を統計的法則の立場より定言し、卽ち微視的に不確言のことを只巨視的にのみ法則を定立しうるといふことも、寧ろ客觀的現象と主觀的なる觀測手段との不可分の關係の自覺に基いて言はれうることであり、あらゆる意味にての主觀より獨立したる自然そのものゝ法則的認識の不可能の自覺より出づるものである。主觀と獨立に存する物質的自然の辨證と言ふ如きは模寫說的にあらざれば古き形而上學的獨斷を出でず、そは毫も法則的なるものを妥當的に導きうるものではない。自然そのものが辨證的なりと言ひ得べきは、それが主觀の行的關與に於てのみ初めて言ひ得べきものである。プランクの理想としたる「擬人主義よりの脫化」に成立するといふ純粹物理學の理念は寧ろ客觀物理學の理念のことであつて、新物理學は自然界の認識構成に於ける人間的行爲的制約を實證的に自覺し

たるものと言ふべく、量子力學は寧ろ自然構成に於ける主客の不可分を裏書きするものである。しかして因果の法則が統計的規定性に外ならぬと言ふことは、不可視單位が巨視的法則の上で偶然的であることが、巨視的法則たる外なき自然科學的法則の上よりは不可規定なることを言ふ迄であつて、これを恣意的無法則性として斷定するものではない。換言すれば自然因果の法則は實體的なる個性の法則に對して規定的手段をもち得ざることを認めるに過ぎずして、必ずしも統計的法則以外の個性法則を否定するものではないと言はねばならぬ。法則の基礎たり內容たるものの個々にもつべき法則性を許さずして統計的に法則性の確持され得べくもなく、統計的法則は個々に實體的にもつ個性的法則を豫想する。只後者は自然科學的實證の手段を缺くといふに過ぎない。ヘーゲルの辨證法が事物そのものに於て示さるゝ自然の本性たることを主張する點よりして、自然そのものに於ても亦自然辨證法の成立することを言ふは不當ではなく、ヘーゲルの辨證法自らが一面、自然辨證法の契機をもつことは否定出來ない。しかし自然そのものの法則性の認識にあたつても、主觀性の要素の無視に於ては不可能なること、現代物理學の示すが如くであり、單なる自然辨證法の成立し難きことは反面却つて、それが本來辨證的にあらざる自然に加へたる思惟論理の擬制たるに過ぎざることを示す。ヘーゲルが一皆事物を辨證的なるものとして認めたのは、彼が自然の認識に於て主客の對立的要素を認めるによると言ふよりも、寧ろ彼は自然そのものを本源的に唯心論化したによるの

である。自然をその靈によつて自働するものとし、自然に見出さるゝ法則性をこれに基づくものとし、その法則が單に性巨視的立場による統計的なる運動の法則としてゞはなく、それぞれに自因する實體の法則として見るとき、それはおのづから實體自らの個々に個性的なる法則性を認める事とならざるを得ないであらう。しかしてかゝる實體的なるものの個性法則を認むることは、しかし多元的相關性を根源的なる形態として認めることであつて、必ずしも宇宙の推移過程を二元相反の辨證的過程としてのみ解するを許さゞることとなる。

十一

現實的事物そのものの眞性の把捉的思惟形式としての辨證法が、現實存在の一樣相としての自然に對して全たき妥當を示しえざること上述の如くでありとすれば、同樣に他の存在樣式をもつ歴史的領域に對して辨證は如何なる力を示すであらうか。辨證は吾等の歴史的現實の根本特質を示すものであり、從つて又これの眞相と本質を把捉解明するに足る思惟形式であらうか。ヘーゲルにてはその歴史哲學にても辨證が根本の原理として把持せられ、世界歴史の推移過程の根本動力であり、また世界史の意味把捉の思惟形式であつたことは贅說を要しない。ヘーゲルにとつては辨證的なる思惟圖式が人間的歴史的領域に妥當するものといふことは問題でなかつたのは固よりである。辨證法そのものは彼にとつては世界圖式であるならば、歴史が、すべてを創造する神の思惟に於ける意

圖の外に横たはるものとは考へ得ない筈である。彼にては別種に考へられたる圖式を、異別の歴史といふ領域に轉用したものでないことは言ふ迄もない。しかし吾等にとつては、彼の辨證法が又同時に、存在に對する解釋の原理、歴史思惟の論理的形式でもあつたことを指摘することよりも、寧ろ問題は、この辨證法が現實に歴史把捉の思惟原理として充分なる意味内容をもつか否かといふことである。しかも吾等は尚ほ彼の辨證概念そのものが抑々如何なる特質をもつものなるかに就て、一應の吟味を遂げ、その意味規定の仕方によつては、歴史に對する—單なる推理的思惟ではなく—把捉的思惟の根本原理としてはある限界に撞着するを認めざるを得ないと思ふ。

辨證といふ概念は必ずしも一義的に明瞭なる意味内容をもてるものではなく、それ〴〵の哲學者によつて各個に異りたる意味をもつものであるが、特にそれの本質的特質と言ふべきものを擧ぐれば、それは、實在の眞實が自らにもつ矛盾、その矛盾の故に對自に又は對他に否定的對立を齎すこと、しかもそれに拘らず否定的對立に於て媒介する第三者のあつて統一止揚さるゝといふこと、凡そこの三つの特質は如何なる辨證に於ても、その與へらるゝ意味の輕重と種々なる變樣をもちつゝも、常に存する所の特質と思はれること既にも言及した所であつた。

ヘーゲル自らに於ても、その辨證法の第一の特質は實在を矛盾的として認めることである。そのことは固より同一律を根本の原理として承認することを排斥する。「矛盾は同一性よりも深い。」彼に

よれば、同一性は單純なる直接なるもの、死せる存在の規定に過ぎない。然るに矛盾は一切の運動と生命性の根であり、自身の中に一の矛盾をもつ限り、自ら動き、衝動と活動をもつ。元來、古代懷疑論者が辨證概念を否定的に使用し、一般的矛盾及び提說されたる諸主張の無意義を結論し、一切のものに眞理性を拒まんとしたのに對して、ヘーゲルはこれを積極的に使用し、實在に於ける矛盾を內面的に生かしむることによつて却つて一皆のものゝ「運動に於ける眞」を見んとした。一切の存立するものが、かく自らに於て矛盾を認めるは、それ自身理性的なるにより、「理性的なるものは、まさしく諸對立物を觀念的契機として自らのうちに含むことに於て成り立つ。」

辨證が生動の論理として實在を運動と移行に眺められたことは特質的なる思惟法として認めらるるが、同一律を單に死せる固定としてゞはなく、究極の根源者としては、これを否定し去ることは出來ないであらう。それ自らに不同のものなくしては、動くといふことも不可能であり、究極の同一律なくして矛盾律といふことも成立しない筈である。殊に歷史に於ける論理的原理としては同一的なるものを消去し去ることは不可能である。何となれば私が他の論考に於て考究した樣に、歷史は根源の自覺に成立し、自覺さるべき根源とは個性的に自らを支持する實體性であるからである。矛盾の論理による歷史觀に於て、吾等が歷史の具體的事實に卽して肯ひ難きことは、歷史に於ては推移はすべて「反對者 Entgegengesetztes に變はる」とせらるることである。ヘーゲルは有限的な

るものの辨證法に關して述べ「辨證法によりて有限的なるものは、卽自的にそれ自らの他者として、それが直接的である所以のものを超越して追ひ遣られ、それの眞反對のものに變はる。」又精神界に於ける辨證の存在に關して、「法律的及び人倫的領域に關しては、唯一般の經驗上、或る狀態もしくは行爲は如何にそれの眞反對に變りがちであるかを想起すればよい。『法も過ぐれば不法を招き、』『無政府と專政主義との兩端は相互に誘致し勝である」ことは、「悲喜兩極端は互ひに替はり合ふ」ことと等しい。茲にヘーゲルは變化とはすべて反對に移動するてふアリストテレースの運動の考想に從へるかの如くであるが、尙ほ「思惟する理性は言はゞ差別的なるものゝ鈍く丸められたる區別、表象の單なる多樣性を本質的區別卽ち對立に尖銳化する」といふを見るとき、彼は尙ほ存在するものの論理を思惟の論理に當てはめて考へてゐる感がある。[註十一]なる程思惟は「雜多なるものを矛盾の尖端に驅り上げて」明瞭化することは多いが、多樣の本質そのものに於ては決してそれは單に二律背反的な二元對立の圖式にのみ歸せられるものではなく、眞相は却つて多樣の本質をもつこと、恰も一つの物體の運動はたゞに二つの反對の方向を含むのみならず、多樣の牽引力の綜和に於てその諸力の作る複合せる稜形の對角線の方向に進むが如くであらう。純然たる論理化の立場に於ては肯定と否定との論理形式に單樣化されるでもあらうが、歷史的に存在するものの變化には自己支持力をもつ多數の個性の相關關係に於て成立するものであつて、これを單に極端なる對立に由てのみ理解す

ることは一の抽象に過ぎず、決して具體的思惟として事實の眞相を把捉する所以ではないであらう。歴史に於ては實存する多樣性が本質的には反對する二者に單樣化されるのではなく、多樣は本質的には多樣の個性的實體に基づくのである。歴史的變化をすべてこの極端より極端への對立と推移としてのみ解する辨證は、稍もすれば矯激なるものに受け取らるゝ兇器とすらなるであらう。ことに歴史を作る要素もしくは實體としての個性そのものに就て見れば、あらゆる歴史的推移を通しても、個性自らは決して自己脱化をするのでもなく、正反對的なる他に變異するものでもない。歴史に於ける變異の多樣は實體としての個性の多樣の相關に於て產み出さるゝ現象に過ぎない。しかして史的推移を通して各々の實體は同一的に自己支持をなすのみならず、全體を通じて歴史の連續を保持するものである。絶對に完全なる革命がある所、そこに全たく新たなるものゝ連續といふことも不可能であり、一般に歴史は成立しない。そこには全たく新たなる歴史が書き初めらるべしとしても、言葉、文字、人間、國土等の內容的に連續を保持するものあるを認めねばならぬ。ヘーゲルの辨證法的史觀の如きも、全體が一の目的論的聯繫をもつ限り連續的であるといふことが出來る。

ヘーゲルに於てなされた歴史の論理化に於て、その「歴史」は生ける個性の現實といふよりも寧ろ多く精神史であり、その「論理化」は歴史そのものの具體的思惟といふよりもやはり多分に推論式化である。世界史の過程が何故に推論式の形をとらねばならぬかに就て、ヘーゲルは、精神は自らを

根源的に分割して自らに對立せしめる。この判斷に於ける存在は唯推論式の形式に於てのみ充たされるとする。しかし歴史に於けるこの根源分割は論理的命題のSとPの分裂關係でなきは固よりである。歴史に於て見らるべき形式は寧ろ S ist unendliches P であり、個性を示す無限のPはその根源のSと二者の一が止揚さるべき對立相剋の關係をもつのではなく、Pに於て根源のSが個性の形に於て現實してゐると考へねばならぬ。その推論式は單樣なる直線の推移ではなくして、無限相關の立體的經過である。この後者にてはSがPに分割するのではなく、Sは根源に自らを支持しつつ無限の個性を生産するのである。歴史の論理は思惟形式の適用ではなくして、更に具象的な生産の論理でなければならぬ。元來ヘーゲルの辨證はカントの先驗假象の批判としての辨證と思想的の聯關をもつものである。カントの先驗論理は悟性の權能の及びうる、正しくは構成原理の正當に主宰しうる領域のみに限られ、生活、道德、歴史、絶對に關する領域は非學的領域として普遍妥當的理性以外に横たはるにあらざれば、只道德的信念の對象としてのみその意味の認められ、これを認識の領域に混じ入るときは卽ち實質なき假象となり終る。これ固より理性そのものに先天的にこの假象を措定せんとする傾きをもつの故であり、この先驗假象を根本的に批判せんとするのがカントの所謂辨證であつた。この思想は後の獨乙觀念論の辨證的形而上學と決して無關係でなきは言ふ迄もなく、ヘーゲルも亦、この生活、道德、歴史、絶對の領域を非學的に止まらしむるに安んぜず、こ

れを所謂「論理の學」によつて深き論理化を遂げようとした。そしてこゝに彼は前人未到の大いなる思想體系を組成したが、彼は抽象の論理ではなく、具象の論理を意圖しつゝ、しかしその論理は尙ほ思惟を思惟する思惟の論理、理性の推論式の基本形式を出づることなく、ことに歷史の論理は精神の推移としてゞはなく、更に具體的に個性的實體の論理、生產の論理の創出に至るべきであつたらう。矛盾が反對と概念上相別たれたのはアリストテレースに於てゞあつたが、これは彼に於て形式の論理と實在の論理とが相分たれたがためであるが、形式の論理を具象の論理に戻さうとしたヘーゲルの意圖よりせば、論理を思惟の論理より更に實存の論理に進め、矛盾をのみ根本の原理とすることなくして反對を含む個性の論理をもつて、歷史の論理化に當るべきであつたらう。

あらゆる存在するものが論理的性格をもちつゝしかも本來に矛盾的なるものであることは茲に特有の否定概念を點出し、辨證の一特質を形作ること言ふ迄もない。すべて悟性的な固定的規定を否定してこれを動ける辨證に齎らし、「同一の今に於てこゝにあつてしかして此處にあらざる」ものとして見、矛盾をもつ諸物を否定を通して動く動的なるものとして觀ずることは辨證の特質である。Daseiender Widerspruch としての現實は否定によつて運動し、固定的孤立的な事物規定を生ける動態に齎らさうとする。かくして「哲學は具體的なる思想をのみ取扱はねばならぬ」といふヘーゲルの意圖にも適ひ得るのである。併し乍ら吾等は尙ほ普通、辨證法に於てその特質的なる要素をなす否

定そのものの意味內容を明確に規定して、辨證を愈々具體的なるものとし、これを歷史的實在のまことの原理としてもち得る意味を考慮しなければならぬと思ふ。最も具體的な、從つて歷史に於ける辨證がもつ否定は、絕對的なる否定であるか果た相對的な否定であらうか。またその否定は限定といふものと同一の意味をもつものなるか果た異別の意味をもつものであらうか。歷史的なる實體は單なる否定によつて自らを無とし又は他に變異するものではなく、あらゆる變異を通して自らを同一に支持する個性をもつものであることを先きに言つた。かゝる歷史的實體の相關に於て成立する歷史の具體相に於て適用さるべき否定は、絕對的もしくは實體的否定ではあり得ずして只相關的なる否定である。歷史に於ける否定は個性を絕滅する否定でなくして個性の相關的否定である。歷史的實體に關しては、論理的否定とは異つて、如何にこれを否定し、たとひその肉體を殺すと雖も個性がもつ歷史的意味は無となるものではない。歷史的個性に對して絕對的否定をいふことは凡そ意味のなきことである。歷史に於ける否定は言ひ換へれば個性を殺すことではなくして個性を生かすことである。このことは同時に又歷史に於ける否定は卽ち寧ろ限定であることを意味する。辨證的否定とは正しくは同格的な二者中一の質を奪ふことであるが、歷史に於ける個性の相關に於ける相對的否定は寧ろ限定である。そこに否定さるべき個性はそれ〴〵に自らを保持し、相關的個性の母胎となる根源的なる個性がこれの媒介的基礎となるといふよりも、寧ろその自己限定として考へらるべ

きである。歴史的個性の相關は實は根源的個性の自己限定であり、これが同時に相關を通しての個性の陶冶であるといふ意味をもつ。歴史に於ける否定は卽ち陶冶である。歴史に於ける相關は單なる「否定的」によつてのみ特質づけらるるものではない。相關は何等かの相互制限を受ける意味にて否定的であるとも言へ樣が、歴史的事象はすべて人間的意志の實現にあらざるものなく、實現さる限りに於て積極的であり、限定的である限り否定的であるが、實現して存在してゐる限り、寧ろ根本的に積極的であり、否相關と限定を通して如何にしても變質又は絶滅すべからざる個性の積極性を基としなければならぬ。從つて單に直接性の否定といふことが歴史に於ける辨證の全たき意義をなすものではない。經驗的に與へられたるものは有限的であり相關的であり、從つて媒介的であることは明かであつても、眞に基柢的なるものは却つて吾等に否定すべからざる直接性に於て與へられて居ると言はねばならぬ。又辨證を單に反省に於てその基礎を見出すこととしてのみ說明するは、歴史に關する限り尙ほ解釋的觀照の立場を脫しない。歴史は根源より個性を產むものとして、陶冶するものとして、凡そ反省とは逆の構成的說明をもつて全たくされると言ふべきである。辨證に於ける否定が相剋の對者を絶滅するといふ以外に自覺の意味をもつならば、それは自他肯否を含んだより深き綜合をもつ自己限定であり、實在の陶冶であり、個性生產の意味をもつべきものである。具體的思惟を所期したヘーゲルの否定には尙ほ思惟の論理のシェマをもつ限り、眞に事相の論

理とは言ひ難く、又その限り歴史に完全に妥當する論理であるとは言ひ難いと思はれる。ヘーゲルは「辨證とはその特徴的なる規定性に於ては寧ろ悟性規定の、諸物の一般に有限的なるものの固有にして眞實なる本性である。」として、悟性的な有限的規定の否定に於て却つてその無限の生ける眞實を顯はさうとしたのであるが、とり分け「綱要」にては悟性的に規定されたる世界を前提してこれの否定より進みたる結果は、必ずしも悟性的に形成されざる歴史の世界の如きものの直接にして具體的な世界そのものの眞性の把捉を、その思索の發足的基礎として逸したるやの觀なきを得ない。しかして後に對象とせられたる歴史の世界は論理化されたといふよりも寧ろ形而上學的豫想のヴェルを掩はれた精神史の世界であつた。辨證の論理が完たき意味にて歴史に適用さるべきものとしては、より切實に人間的生と個性の眞實に於て汲まれたる論理たるべきであつたらう。

辨證に於て否定するものは相互に同格にして同等のものたらざる限り相互の作用をなしうるものでなく、しかも同格同等のものは否定に於て結果を導き得ざるが故に、辨證には常にこの對立者に何等かの媒介的なる要素を見出さんとする。しかしこゝに吾等に觀取さるべきことは、辨證に於て相矛盾する對立者を必須として考ふることは、思惟の論理の矛盾律とともに二元論的世界觀の基調の掩ひ難きものあると同時に、しかも、この二者を單なる否定的對立として見る以上に、一が他に優位し、對者を自己の内に包んで生かすといふ豫想の不可缺に潜めるものあることである。否定と

は自らと同格にして力に於て具通する限りその作用をもつものであるが、その力まさに相等しき時、それは休みなき辨證と何等かの止揚をすら結果することは出來ないと言はねばならぬ。媒介とはかくて畢竟否定する對者に於てこれに共通する基礎、もしくは否定する作用そのものの中に優位する超越的基底を認めることに外ならぬ。所謂主體に對して基體が否定的に對立すといふとき、こは單なる同位同格の意味にてゞはあり得ない。主體に對して基體はあく迄も基礎であり、根本制約であり、母胎であると考へねばならぬ。基體がかく主體に對して對立しつゝ然もそれの基礎となるとき、主體は基體に對する對立者としての論理的意味にては一樣の對立者であるが、歴史的領域の事相に卽しては個々に多樣の實體性をもつ個性である。かゝる具體的な個性に對して基體の否定性とはとりも直さず限定性の意味であり、そして個性を個性として限定し陶冶するものとしてはそは生産的意味をもつものでなければならぬ。媒介がもし對立者に對して外より加はる第三者ではなく、否定的相關の作用そのものに於て作く限定的自己陶冶力であるとするならば、媒介の力は個性が各自との相關を通して自己陶冶をなし行く基底的力以外のものではないであらう。具體的なる歴史の世界に於ては否定的對立は卽ち個性限定であり、對立者は單に二元の矛盾的相反ではなくして相互に實體的な個性相關である。歴史的領域に於ける辨證は個性の辨證であり、かゝる辨證のみ卽ちまことの實存の辨證である。それは單なる有限と無限との對立的辨證ではなく、それ自らに無限

性をもつ個性相互の現實的相關そのものが根源的無限との關係である。それは基底的なる無限者の變形と自己媒介ではなく、各自に實體性をもつ個性的なるものと個性的なるものとの相關に成立する。先きにも引用せる如くヘーゲルに於ける媒介とは、自らが他となりしものが、自己自らとの媒介たる意味をもち、媒介とは畢竟自己媒介たるの性質をもつたのみならず、他化する基底に絶對性の許さるゝ故に、相關は畢竟するに基底の化現、一の必然に操らるゝ化戯たるの感を呈した。しかしそれは歴史の眞實の把捉ではなく、歴史を作る個性の相關は自因と自由の意識をもつ獨立せる實體相互の相關であり、基底を根源にもちつゝ自由と個性を通しての自己陶冶である。

歴史の過程をすべて推理式に於て見ることは、それの必然とする媒介によつて、おのづから歴史的なるものをすべて間接的に見るの嫌ひなきを得ない。凡そ辨證といふことも究極には媒介を絶する直接性を許さずしては不可能である。辨證を具體的なるものに於て見るとき常に特質的なるものゝ一つとなる「相卽」といふことは寧ろそれ自身媒介の間接性を超ゆることである。辨證に於ても推理の根柢に直接性があり、矛盾の根本に同一性が認められてゐる。この直接性と同一性は特には歴史の領域に於ては缺くことを得ぬものであるが、茲には具體的原理として個性化の原理を含むものたることを特質とする。歴史に於ける媒介者とは直接にして同一的なるものゝ個性化する母胎である。歴史に於ける過程は論理的な推理式の過程ではなく、個性的なる實現の過程である。直接にし

て同一的なるものが個性的なる實現に達するは卽ち行爲を通してである。矛盾的、否定的なるものを媒介相卽せしめることも、それが單に論理的なる推理に適合するといふだけでは未だ必ずしも歷史に實的に妥當するものとは言ひ得ない。論理的推理にては理念といふものも不可實現的、不可到達的、連續的接近に止まるものを、歷史に於ては行爲を通してこれを實にし實現せしめる。歷史を單に精神の歷史として解するは、只それの表現と解釋の見地に止まるものであつて、完全に歷史の論理といふことは出來ない。歷史を實的に決定しゆくものは個性とその行爲であり、歷史は單なる精神の一樣の表現ではない。媒介が敵對する二者の相剋と廢棄の可能の基礎もしくは二者より高き第三者たるといふに止らず、無限の個性をその相關に於て根源的に成立せしめる母胎であるならば、媒介者は卽ち個性を實體的に產出する根源でなければならぬ。眞の媒介は單に表現の基礎といふのではなく個性の眞を陶冶し行く行的實現の可能の根源たる意味をもつものでなければならぬ。

以上辨證なるものの特質として矛盾、否定、媒介の三について考察したが、辨證がこの三つの特質の各々に就ても、これを純然たる思惟論理的規定の特質に止まる限り、充全なる意味にて歷史の論理たり得ず、歷史の論理として妥當し得んためにはその意味は內容的に改更を餘儀なくさるべきことを見た。辨證なるものが純然たる論理的なる存立に關するものとして所謂概念規定たる間は、その領域に於て充全の妥當をもつであらう。しかしそれが自然的存在と歷史的實存の領域を規定する

ものとしてはその意味内容に改更を受けねばならず、この意味にて所謂辨證の論理的規定は限界をもつものと考へるが至當であらう。或はこの論理的概念的規定は卽ち本質規定であつて、自然の存在も歴史の實存もこの本質をその基底にもつ限り、等しく辨證的特質をもつべきものであると言ふならば、しかし又その限り自然と歴史は何等存在上の特質をもつものではなく、その存在樣式は單に偶然的なるものとなり畢るであらう。事實自然に於て見出さるべき辨證と、歴史に於て見出さるゝ辨證とは嚴密に同一のものたらざるが當然の樣に思はれる。ヘーゲルが辨證を單に抽象的なる形式として取出すことなく、事物そのものに於て見出さるべき法式とした限り、そして又自然と歴史とがそれ〴〵存在としての特質を具せること疑ふべからざるものであるならば、具象的なる事物そのものに於て見出さるゝ辨證は又事象に應じての特色をもつものでなければならぬ。本質のロゴス的性格の故にそれがもつ辨證性は、一樣に自然と歴史の現實に對して妥當すると考へた所にヘーゲルの理性主義の特質と又同時に缺點を見出さるべきであらう。「有限的なるものはそれ自身に於て矛盾し、これによつて止揚せられる」となし、現實がその有限的矛盾によつて基底的なる本質を見出し、現實がもつ矛盾も畢竟この基底によつて必然とさるゝものとするヘーゲルの考へは尙ほ普遍論理的であつて、現實の論理を意圖しつゝ、しかしそは現實を一樣化してのみ可能なるものであつた。事實、等しく矛盾と言つても、自然を自働する原因をもつものと考へても、その矛盾は自覺的

矛盾をもつものではない。また歴史に於ける矛盾とは二元的なる矛盾對立ではなく、多元的個性的相關であることを現實は吾等に示すのである。例へばこれを「生と死」に就て見よう。生と死とは概念關係としては完全に矛盾的對立をもつ辨證關係と見ることを得るであらう。生死は相矛盾する極端なる二概念であり、生は死を否定し、死は生の否定に成り立ちしかも死につゝある生が卽ち生ける運動を現はすのである。しかもここに生死は二元的對立の二要素として連續を示すものでもなく、且つ又それは本質上概念的に把握されたるものであつて、それは誰人の生を指すものでもなく、現實に迄產み出すものでもない。對之自然の領域にあつては、生理的物質的存在に於ける生と死とは、完全に乖離せる非連續的關係をなす。自然にあつては生の事實と死の事實とは決して連續も結合もするものではない。然るに歴史的世界にあつては生死は分離せんとする二要素でもなく、切り離されたる二つの事實でもなく、現實的に誰人かの個性的生に於てあり、しかもそは一の連續的に融合せる生死の一事實である。私の生は單に私の生理的誕生をもつて限界さるゝものではなく、一の傳統の生產の力の中にあり、又單に肉體の生理的死をもつて、その生命が消滅し去るのでもない。そしてこの生といふ一事實はたゞに生死といふ極端なる二概念の結合ではなく、無限の要素の相關に於てなる個性的統一としての現實である。これを思惟に於て二極の相反の結合として概念化することは出來るであらう。しかし思惟の論理は生死を一にもつ個性の實存を導くことは出來ず、歴史の領

域を充全に掩ひ盡しうる論理ではない。

ヘーゲル的な辨證はやはり普遍論理、思惟論理に基づくを特質とし、自ら歴史の論理としては必ずしも充全なる妥當をもちえない所以は、思ふに歴史に於ける「個性」の意味を中心的に考へなかつた點にあると思はれる。歴史を全體として精神史的に考へたこと、現實の個性に眞に自因する實體的意味を認めず、絶對理性の計畫の必然の中に於て見んとしたこと、歴史に於ける變化と推移を二元的なる要因の相反に於てのみ眺めたことなど、史的現實を作る實體的個性の眞相を、眞に具體的に把捉せんとしなかつたによると思はれる。「哲學は只世界歴史の中に反映する理念の輝きをのみ問題とする」と言ふヘーゲルの語が示す如く、彼は歴史をも理念の表現としてのみ眺めた。そこには個々に實體性をもつものの自因する自由と個性的なる行爲との形成としては見られなかつた。それは餘りに單直に歴史を理性によつて成るものとし、歴史を理性によつてのみ理解しようとした。歴史に於て理性を認めることに基礎的なる執心をもつたディルタイが、歴史を個性と類型によつて解せんとしたこと(これにも吾等は決して充全なる滿足を見出すものではない)に比すれば、ヘーゲルは歴史の最も豐富なるものより眼をそむけた感なきを得ない。

ヘーゲルは歴史は概念より意識への移行に於て成立するといふ。しかしてこの「歴史」が精神の歴史ではなく、まことの具體的現實性をもつ歴史であるべきならば、それは個性的なる現實をもつも

のであることを特質とする。卽ち概念より歷史への移行に於ける具體化とは卽ち個性化の過程でなければならず、現實の歷史を齎らすものは個性化の原理であると言はねばならぬ。しかし乍らヘーゲルの歷史の理論に於ては尙ほ眞に個性化の原理が明かになされてゐない。彼の辨證の論理は決して個性化の原理に代はるものではない。否辨證の論理は寧ろ眞の個性化を明かにすることをはばみ、その歷史哲學は個性的現實の眞の把捉より遠ざかつてゐるの感なきを得ない。純粹本質がそれ自ら矛盾をもち、矛盾をもつことによつて自ら運動を起し、この自己運動によつて本質は具體化し、反對の對立とその合一によつて次第に複雜なる內容的なるものをもつに至るといふのが、辨證論的に見られたる本質より歷史への移行と見られるのであるが、しかしヘーゲルに於ても純粹本質が經驗內容を生ずる根本說明に至つては充分明瞭に吾人を肯かしむるものなく、純粹概念の發展を論ずる論理學は感性意識をもつ意識の現象學を豫想し、現象學は意識そのものの成立とその中に存するロゴスの自己體に就て論理學を豫想してゐる。論理が自己外化をもち、自らの限界を認めるといふことが如何にして意識となると言ひ得るであらうか。論理的矛盾そのことは內容を齎らすものではなく、單なる辨證は個性を明かにするものではない。その現實性が個性をもつといふことを不可缺の特質とする歷史に關する論理は、就理性の辨證ではなく、內容生產の論理と個性化の原理を基本とするものでなければならぬ。

しかし乍ら私は歴史に於てあらゆる意味に於て「辨證」を廢棄せんとするものでは固よりない。只辨證を單に思惟論理としての意味内容を盛らるゝ限り、具體的なる歴史の眞實の把捉にあたつて限界を見出さるべきことを言ふのみである。しかして上述せる如く、辨證の特質と見らるべき矛盾、否定、止揚に關して、矛盾といふことを單に概念的な二元的對立と見ることなく、相互に唯一的異別性をもつ多元的個性の自己支持に於ける相關と考へ、否定は、自他の個性の存立を消去する絶對否定としてゞなく、根源よりの限定、陶冶と解し、又止揚は相矛盾する二者がともに全たく異る他へ轉化するといふのではなく、純化しつゝ自らを失はぬ個性の綜合統一、社會的又は民族的個性の自覺形成と解するならば、かくの如き意味内容をもつ辨證こそ、まさに歴史に於て妥當する根本概念であらうと思ふ。しかしてかくの如き辨證はしかし尚ほ歴史といふ事態の存在の觀照又は説明に主點がおかれて、これを根源的生成に於て可能ならしむる生産を全たき意味にて掩へるものではない。しかし辨證をもしかくの如く解しうるとすれば、そは生産の論理と相背くものではなく、生産の論理は辨證を含むことによつて根源的に且つ事態的に歴史の論理となるであらう。しかしてもし、辨證をかくの如き意味内容を與へざるとき、そは思惟論理の範疇を出づることなく、最も具體的に歴史に妥當すべき、もしくは歴史に於て見出さるべき論理ではないと思はれる。

十二

しかし既にも述べた如くヘーゲルの辨證法は、それに「思惟の論理」たる根本特色を除き難いとは言へ、本來抽象と固定を忌む論理であり、單なる形式もしくは方法としてよりも、現實的事物そのものに於て見出さるゝ法則的なるものであつた。その思惟といひ意識といふは固より單なる主觀を脱したる根源的なるロゴスの作用であり、そこにては思惟する作用が同時に事物に於て働く理性であつた。この思惟形式が同時に實在の形式であるといふ思想の根柢には、神學的な宇宙創成的な直觀が横たはつてゐる。歴史に於て妥當する思惟が同時に神の意圖せし計畫の順序を踏むといふ如き、まさにかくの如き綜觀的形而上學的基礎を豫想して初めて可能なのであり、辨證といふことも單なる論理的思惟の形式ではなくして形而上學的要請より出づるものと解せられる。ヘーゲルが辨證の眞義を語るにあたつて「悟性は神の善意の表象の中に含まれてゐるものとして見られてのみ、それを、何者も抵抗するを得ざる普遍的な不可抗の威力をもつものとして直觀せられる」といひ、「辨證法はすべての宗教的意識に於ける本質的契機を構成する」[註一三]と言ふに見ても、この論理の裏に潜む宗教的なるものを見出すに苦しまない。ヘーゲルは世界を創造する論理（これにては一より多の存在を作つた推移が說かるゝ）を、世界を思惟する論理（これにては一より他への推理として跡づける）と同一化した。形而上學としてのみ許さるゝ前者を彼は所謂知識の學として、あらゆる存在をこれによつて論理化したのであるが、しかし既にある存在を論理化するに際して如何にしても論理化しえ

ざるものを前者の知見の豫想に於てこれを遂行した。しかして彼はこの學的遂行に於ては前者の知見に於てまさにその意味をもつべき限定と生產の特質を、否定と轉化の概念に於て論理化し畢へた。しかしその論理化の根柢には神祕主義的なるものの潛むことは明かである。彼の哲學は神祕主義の論理化であつた。否現實を論理化しうるといふ考想そのものが神祕主義的豫想なくしては本來不可能のことである。彼の「絕對精神」と「世界精神」との眞の融合は宗敎に於てなされてゐるのもこのためである。ヘーゲルの解釋にあたつてその最初にして最後である宗敎的基調と神祕主義的直觀を忘るるものは、その最も樞要なる祕鍵を忘るるものである。

ヘーゲルの哲學はライプニッツに於ける樣に、現實の形而上學化たるよりも、寧ろ神祕主義の論理化であつたことは、殊に現實として特殊の性質をもつ歷史の領域の說明に充全の適合を見ざる所以と解せられる。ヘーゲルの歷史は人間の歷史といふよりもロゴスの歷史であつた。彼の言によれば、「方法とは外的形式ではなく、內容の靈であり、概念である。」彼にては事物に於けるこの靈が概念であり、動く精神であり、辨證の因由である。自然とは精神の空間に於ける表現、歷史とはその時間に於ける表現である。歷史とは時間に於て外化せる精神に外ならない。辨證がかゝる精神に基づくものである限り、自然にも精神にも一樣に見出され、一樣に妥當するものであらう。しかし現實に見出さるゝ自然と歷史とは事相そのものとして異る構成をもつてゐる。例へば前者は自然的空

間に於て成立し、後者は歴史的時間に於て成立し、前者にては自然の個物の同時存在があり、後者にては個性の社會的存在がある。この後者にては純粋な二元的對立と直線的止揚關係とはなく、絶對的否定は存せずして、無限否定と個性相關の存する領域である。しかして辨證がその神學的世界創造觀と結合して、自然にも歴史にも同樣に妥當しうるものとすれば、殊には歴史に於ける特殊的具體相に充全に妥當しうる方法としては、抽象を帶ぶるものと言はねばならぬ。辨證が本來抽象と離在の原理たるものではなく、あくまでも具體的事物的なるものに於ける方法たるを期することは、その根源に於て神學的創造觀をもつことによつて可能であり、辨證が神學的創造觀に基づくものでありとすれば、自然と歴史に具通する一般的方法たりえても殊に歴史の特質的なる具體相の原理として妥當するには抽象的であると言はねばならぬ。根源にロゴス的なるものは思惟的であり、ここに「純粋知の發展」、「概念の抽象運動の學」としての論理學が成立し、純粋なる形にての辨證が考へられる。しかし等しくこのロゴス的なるものの存在的及び實存的樣式は、思惟的存在樣式とは異る自然的及び歴史的存在をもつものである。ロゴス的なるものと思惟的存在との直接の關係を直ちに、存在的及び實存的領域に及ぼす所に、辨證法が歴史に適用されて見出す不充全が生ずるものであらう。ロゴス的性格が思惟領域に現はれたる形式は、そのまゝにては、存在的及歴史的領域に妥當しうるものではなく、存在的、實存的なるものがロゴスに起原をもつ限り理性もしくは法則性をもち

うるとしても、思惟領域に於ける純粋辨證の形式が直ちにこの他の領域に無制約に妥當するものではない。しかして又他面、創造的根源としてのロゴスが、肯定否定の極端的二元的過程をとると考へることは、根源的ロゴスにそれの抽象性たる思惟樣式をあてはめたることであり、言ひ換へれば人間的抽象をもつて神の思惟を狹限したるものとも言ひ得るであらう。よしかりに思惟的概念領域は極端的二元的非連續的であるとしても、根源的創造者はそれの完全的統態性の故に連續性をもつものと考へねばならぬ。非連續的なるものは決して完全統態性を作ることは出來ない。且つは又創造的實現は決して假現の虛構たるを得ないならば、創造的實現は個性の創造もしくは產出でなければならぬ。連續的な個性の產出これぞ神學的な創造の世界であり、實存的卽ち歷史的領域とはこれの時間的時代的制約の許に於ける實現である。この意味にて歷史的領域は思惟的概念的領域よりも、より具體的に創造者の世界を象徵してゐる。思惟の領域とは寧ろこの領域を思惟することによつて抽象化したものであり、多元的なるものを極端なる二極に二元化したものが卽ち辨證的圖式と考へることが出來る。歷史に於ける眞の把捉はこの間接的な思惟の圖式によるよりも、より本源なる創造の具體形式によらねばならぬ。產出の圖式は辨證の形式よりもより具體的である。

ヘーゲルの辨證は全體として思惟論理的ではあるが、しかし最も具體的現實的なるものを取扱つた「法の哲學」を見れば、彼の辨證は寧ろ多く產出的であり、有機的ですらあつたことを知る。彼は

いふ、普遍的なるものの特殊化を解明するのみならず更に、産出するものとしての概念の生動的原理を私は辨證法と呼ぶ。これは感情や直接意識に與へらるる對象や命題を混亂せしめ、技工的に誘導してその反對者を導出するのではない。この意味にとるならば辨證は古代懷疑主義者がなした樣に、表象の反對、又は矛盾を導く事に終るであらう。勝義の概念の辨證とは規定を單狹限又は反對として許りでなくこれより積極的內容と結果を産出し且つ把捉する。しかもかくしてのみ規定は發展であり內在的進展である。辨證法は主觀的思惟の外面的所作ではなく、內容の固有の靈の運動である。或物を理性的に考察するとは對象に外部からある理性を附加し加工することではなく、有機的に內容を齎らし出すものである。[註一四] ヘーグルに於ても、感性經驗を始元とする意識の學としての現象學、悟性的規定を豫定してこれの否定より純粹知の發展、概念の抽象運動の學を開展する論理學、人間意志の根本措定をもち現實的社會の法を考察する法律哲學、自由の意識の基底的存在を確信し民族興亡を理念發展の必然に結合して解釋せんとする歷史哲學、これ等の學的形成の諸領域に於てその用ひらるゝ辨證の意味も必ずしも嚴密に一樣であるとは言ひ難く、多義性少くも多樣性をもつてゐるが、それが特に人間的具體的なるものに關しては、その辨證的形式性は生産的內容を必ずしも排拒するものにあらざることは、彼が屢々「生産」の概念を用ひて意に介しなかつたことによつても知られ得る。生産性を拒外する辨證は具體的なる歷史に對してその把捉的思惟の根本原理たる

りとを得ないと言ふのが私の考である。そして發展が同時に根源への自覺、歸入深化たることも生産の概念をもつて最もよく說明出來ると思ふ。歷史的事實はすべて根源よりの生産であり、歷史的認識は一般に根源の自覺であるからである。

單なる辨證をもつてのみ歷史を理解することは史的過程を一律に推理（シュルース）の推移を以て解することとなり、歷史的理解を單直なる直線的圖表に從はしむることとなる。このことは歷史をたとひ時間的なるものとして解しうるとしても、個性の空間として解することを薄弱ならしむるのみならず、民族の興亡をも一の世界精神的なる原理による攝理の必然として解し歷史より行爲の意味を拂拭する。從つて又歷史の上に活動する個性の特質たる多樣の空間的相關關係による多樣の豐富さを奪ひ、自らに自因の自覺をもつ實體的な個性が歷史構成に於ても固有の自由と責任を無意義のものとし、歷史を味氣なき必然の陰影たらしめる。

歷史的時間は單に矛的なるものの辨證の過程といふよりも個性生産的なるものであり、うちに個性の相關に於て成る空間を含むものである。歷史は直線的進行ではなく空間的な個性內容の生産的擴大である。歷史の發展は歷史的現實が矛盾をもつの故であると言ふよりも、歷史的實體自らが個性化の原理を本具するからである。歷史の發展は理性が矛盾する反對者に轉化するによると言ふよりも、實體が相互に自性を保持する個性の多元を生産するが故である。よく言はるゝ樣に個人と時

代とは對立的な相互現定的辨證性をもつものである。しかし時代と個性がもつ關係も、より根柢的には生産的性格をもつものである。無限のものを有限に於て規定するといふことが矛盾的性格をもつ故に、規定態はすべて自己轉化をもつとせられる。しかし乍ら歴史的領域にあつては自性を轉化せしむることなくして他を生産し、他に影響することがその本性である。時代と個性の相互否定といふ如きも、時代が個性を産むか、個性が時代に影響するかであつて、否定の關係よりも寧ろ限定の關係であり、矛盾の關係たるよりも生産の關係である。

産むといふことは元來生理的なる人間個人が個人を産むといふことに成立し、他には適用し得ざる概念とも言へるであらう。しかし一般に生動と増大のある所そこに産むといふことは考へられる。私は生産なる概念を特に個性が個性を産むといふ、個性的實體が個性的實體を産出したる場合に適用し、これが歴史的生成の根本特質であると考へたい。正成は正行を産んだと同樣に、光琳は光琳派繪畫の樣式を産み、足利時代は能樂の藝術を産んだのである。産まれたものは歴史的存立として個性をもつと同時に、産みし實體と個性的相關をもち、個性的な連續の關係をなすのであるが、この生産の關係に於ては一方が母胎たる點に於ては一方的規定關係をもつてゐる。被生産者が實體性を形成した以上個性相關關係であるが、史的事態にあつては多くの場合、一方的優位關係が認められ、これが所謂影響と言はるゝものである。

辨證といふことは根本に於て思惟論理的であり、肯定否定、積極消極の相卽を說くことも、畢竟は對極の二元と背反の二律を豫想せるものである。しかし生產の論理は思惟的、概念的たるよりも實體を原本的に措き、實存の具體的眞性を離るゝことがない。それは矛盾を實存の根本本質とするよりも實存の性格を反對的、多元相關的なるものとする。實體の働きを自己轉化よりも寧ろ個性的生產と考へ、多元の根源を動的一元的なるものとし、轉成の終極に絕對理念を考ふるよりも、無限性をもつ根源を生產の始原と考へる。その生成は飛躍的であるよりも連續的であり、直線的であるよりも空間的であり、連續するものは個性的異質をもち、空間的なるものは個性の相關をその內容に充溢せしめる。辨證には矛盾がその一貫する原理であるが、生產にては個性化の原理がそれに終始して作用的である。しかし既にも述べたる如く辨證も單に思惟論理としてではなく、實存する個性の對立と綜合の意味に適用されうるとすれば、辨證の論理は生產の論理と完全に相容れざるものではない。寧ろ生產の論理は上記の意味にては個性の辨證を含むものであり、或は歷史に妥當するものとしては辨證は生產的なるものといふことが出來る。單なる思惟の論理、概念の論理として、そのまゝにて歷史に適用せんとするとき、そこに限界のあるを指摘せんとするまでゞあつて、要は個性の辨證として辨證を歷史の領域に於て生かしめんとするのみである。辨證が具體的であれば、それが內に個性化の原理を含むものでなければならぬ。單なる二元的反立の原理をもつては、多元的

個性をもつ歴史的現實に迄の開展を齎らし出すことは出來ない。歴史に於ける辨證は生産的でなければならぬ。辨證を含む生産の論理のみ歴史の論理である。（未完）

註一　西田博士も、自己自身を限定する世界の個性限定を生産作用と考へることが出來るとして居られる。『世界の自己同一と連續』思想一五四號二六頁。

註二　Rosenkranz; Erläuterungen zu Hegel's Encyclopädie der philosophischen Wissenschaften. 1870. § 487

Hegel; Grundlinien der Philosophie des Rechts. Lassonausgabe. § 4. Amm.

註三　Hegel; Wissenschaft der Logik. Lassonausg. Th. 25, S. 493.

註四　Hegel; Encyclopädie. Lassonausg. Th. I. 3. Abt. § 237.

註五　Hegel; op. cit. §43. Encyclopädie, herausg. v. Henning 2. A., Th I. Vorbegriff.

註六　Max Planck; Die Einheit des physikalischen Weltbildes. 1909.

Cassirer; Substanzbegriff und Funktionsbegriff. 1923.

註七　Hegel; Wissenschaft d. L. Th. II. Kap, 2. C. Amm. 3

註八　Simmel; Probleme der Geschichtsphilosophie. 1922. S. 213.

註九　Meyer; Zur Theorie und Methodik der Geschichte. 1924. S. 36.

註十　拙稿『歴史に於ける法則的なるものと個性法則』東京文理科大學哲學論叢第三輯。

註十一　Hegel; Wissenschaft d. L. Th. II. Kap. 2. C. Amm. 3.

註十二　Hegel; Encyclopädie, herausg. v. Henning 2. A. Th. I. Vorbegriff. Zusatz. I.

註十三　Hdgel; Philogophie des Rectts. § 31.

訂正　九月號九六頁終より三行　秀信は尙信の誤

九七頁一行合みは含み、三行即近するは卽近なるの誤